# 約 6 年間在宅血液透析（HHD）経過中に 2 回の下肢切断を経験し継続した症例

医療法人衆和会　長崎腎病院

○北田鮎子　宮﨑千秋　中山美季　堀幸一郎　舩越　哲

【背景・目的】
透析患者の下肢切断後の 5 年生存率は 50%以下と低く、死に至らなくても QOL は著明に低下する場合が多い。今回、下肢切断後にHHDを導入し、その後 2 度目の切断を経験し、6 年経過し得た症例を報告する。
【症例】
70 歳男性、1989 年に慢性腎炎で血液透析導入、1993 年に献腎移植を受けたが 2016 年 9 月に血液透析再導入となった。2017 年 8 月に右下肢 ASO 憎悪により大腿より切断術を受けた。自宅までは 150 段の階段があったものの、介護通院と患者家族（妻、娘）の協力で HHD 訓練を完遂し 2017 年 12 月に HHD 移行となった。その後 2022 年には健側の左下肢のリスフラン関節切断となり、一時期外来で施設透析を受けていたが、再トレーニングを経て HHD に復帰した。6 年間の経過を通して HHD が継続できた要因として、(1) 患者本人の強い意志、(2) 家族の熱意、(3) 通院介護事業所の理解、(4) HHD による体調維持、が考えられた。
【考察】
今回の下肢切断患者の症例により、患者の意志や家族の献身的な協力、医療・介護者の支えがあれば、ハンディキャップを抱える患者でも HHD は可能であることが示された。